

タケを剥ぐ

—蓋付き飯びつの製作現場から—

萩 野 なつれ *

軒先に腰掛けた女性たちが、長さ60センチメートル、幅5ミリメートルほどの割竹の表皮側（タケ表面の緑色の部分）と中身側（内側の白い部分）とを、ナタを用いて剥いでいく。彼女たちのそばで、じっとその様子を見ながら「私もタケを剥いでみたい」と口にする、と、即座に「手を切るよ」とひとこと。あるときは「硬いから（力が要るよ）」と。

なかなかナタを触らせてもらえないことが続いたある日、なんとなく言葉に“保険”をかけて“今度”，ナタの使いかたを教えて、「勉強したいから…」と小さい声で付け足しながら言ってみた。すると、ナタを持つ手は動かしたまま「やってみたら」と返ってきた。

ここは東南アジアの内陸国、ラオス人民民主共和国（以下、ラオスと略する）中部に位置するヴィエンチャン県農村部である。ここで私がお世話になっているラオの人びとは、もち米を主食とする。彼らは、竹簍で編み組まれた円錐形を逆さにしたような蒸し器に、水に浸しておいた米を入れて蒸し、竹簍で編み組まれた浅い平皿で蒸した米の粗熱をとり、竹簍で編み組まれた蓋付きの飯びつに蒸

した米を入れておく（写真1）。使用するタケの種類、竹簍の長さや厚さ、表皮もしくは中身を用いるのか、はたまた表皮と中身とを分けない剥ぎかたなのかなど、製作地域や製作するモノによって変動はみられるものの、竹簍の存在なくしてラオスの台所用品は語れないのではないだろうか。

冒頭の会話は、蒸した米を入れる蓋付き飯びつの製作現場で、ちょうど竹簍をつくっている女性たちとのやりとりであった。

タケの伐採にはじまり、節を切り落とし、稈のおおよその長さを揃え、均等の幅になるよう稈を縦に割り、割竹の表皮と中身を剥ぎ、竹簍の厚さを整えつつ、表面の毛羽立ち



写真1 左手前が、蒸した米を入れている飯びつ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

をとる。ざっと、このような過程を経てやっと編み組みに使用する竹籤ができあがるわけだが、この一連の工程は彼女たちの見事なナタ捌きとともにおこなわれる。彼女らの談笑がつくるなごやかな雰囲気の中で、タケに刃を入れるさいには迷いがなく、それでいて竹籤に添える手元は柔らかい。ナタ使いに見入ってしまい日が暮れかけていたこともある。

ナタを握る手の人差し指に、使い古した服の端切れを指が切れてしまわぬよう、そして刃の滑り止めとなるよう巻いておく。ナタを手にとってみると、ずっしり重い。木材や木炭、ココヤシなどを割るときに柄の端のほうを持って遠心力を利用して刃を入れるのとは違って、柄の部分を二の腕と脇腹のあいだに挟み、刃の部分に指をかける持ちかたをするからだろうか。

改めて、ナタの握りかたや刃の入れかた、指や手首の動かしかたを観察したのち自分の手元を調整してみる。なんだか、自分でも心配になるほど手元が危なっかしい。そうして、十分に真似たつもりでナタを持っても「そうではなく、“こう”」と、彼女たちは自身のナタを握る手を強調させる。これまで「手を切るよ」「硬いから」と言われ続けてきたからか、うっすら手汗をかいていた。

ここで使用しているタケはマイ・ヘー(Mai hae, 学名 *Dinochloa scandense* Buse) という種のタケで、稈の直径は1から2センチメートル、稈壁の厚さは0.5センチメートルほど、柔軟性があるのが特徴である[Kameda *et al.* 2019]。肉厚でなかの空洞幅

が狭いマイ・ヘーは、肉厚ゆえに表皮を含めて3から5本の竹籤をとることができる。編み組み素材としての柔らかさと、竹籤が多くとれることがこの地域でマイ・ヘーが飯びつ製作に選ばれる大きな理由であった。

彼女たちの手元と自分の手元を比べて、なにがどう違うのかよく分からないまま、ひとまず目の前にある割竹の“残物”に手を伸ばした。タケは表皮に近ければ近いほど地面から水分や栄養分を送る維管束が集まっているため剥ぎやすく、内側の空洞に近づくほど硬い。そのため、表皮側から順に編み組みに使用する柔らかい竹籤をとったあとの割竹、つまり空洞に近い硬い部分は家庭から出るゴミとともに燃やされてしまう。私は彼女たちが竹籤をとり終えたあとの、まだかるうじて肉厚な割竹の残物を探してタケ剥ぎを試みた(写真2)。

いざ割竹の端から刃を入れて剥いでみようとすると、うまく刃が入らない。そんな私の様子を見て、またしても彼女たちは「そうではなく、“こう”」とタケに当てる刃の位置と、いとも簡単そうにタケを剥ぐ姿を私に見せ、言うのである。ナタを握る指先に力を入れすぎると怪我をしてしまいそうなほどグッと刃が入る。維管束ってこんなふうに並んでいるのか…、タケって繊維の集まりなのだな…、とナタを片手にタケと睨めっこする時間が続く。余った割竹のくずから、更なるくず(お世辞にも竹籤とは呼べない、くず)をいくつも生み出していく。そうしていくうちに、あるとき絶妙な指先の力加減で割竹の面に対して平行に刃を入れることができるよう



写真 2 初めてナタを握らせてもらえた日
嬉しそうな私と危なっかしい手元、左手前が割竹
の残物や削りくずの山。

になっていた。

以前、彼女たちに飯びつの編み組み技法を誰から学んだのか尋ねたときのことを思い出した。大抵の場合「ほかのひと（が編んでいる）のを見て、できるようになったのだよ」と返ってくる。その言葉を真にうけた私は、計 10 日間ほど編み組んでいる場面に張り付いていたのである。一向に編めるようになる気配がないなか、タケを編み組む彼女に事の一部始終を伝えると「見るだけではできないよ、編んでいくと“指が慣れる”から」と笑いものにされながら製作途中の飯びつを渡された。

彼女たちの手の動きを見ながら自分の手元を動かし、気がついたときにはタケを編むことができるようになっていた。彼女たちが話

す言葉を文字どおり真にうけないことと、“指が慣れる”を実感した瞬間であった。

そして、ナタの扱いもそうであった。彼女たちのナタ捌きと「そうでなく、“こう”」という助言のなかで、自分の手元を試行錯誤させる。身体が、手元が、握り加減や力の入れ加減を覚えていってくれる感覚があった。

均一の厚さにタケを剥ぐにはほど遠いものの不恰好なりにナタを用いてタケを剥ぐ、それっぽい動作だけができるようになったころラオス国立図書館である本をみつけた。それは 1985 年に刊行された小学 1 年生から 3 年生向けの手工芸（ラオ語 *hatthakam*）の教科書で、紙の折るかたや土の加工のしかた、玩具の作りかた、裁縫のしかた、そしてタケや木材の使いかたなどが各学年のレベルに合わせて記載されていた。日本の小学校教科書というところの生活や図画工作、家庭に近い分野である。

教科書をめくっていくと、小学 3 年生で学習するページに「タケを剥ぐ（竹籤をつくる）」という項をみつけた。そこには、伐採からしばらく時間が経ってしまったタケは水に浸しておくことで剥ぎ易くなること、ナタの刃部分に親指と人差し指をおくことで均等な厚さにタケを剥ぐことができる、といった内容が見開きで挿絵とともに描かれていた [ກະຊວງສຶກສາ 1985]。

のちに、当時の授業や子どもたちのタケ工芸学習について、調査地周辺で 1980 年代に小学校教員をしていたおかあさんに聞いてみると「学校では教科書の内容を読み合わせる

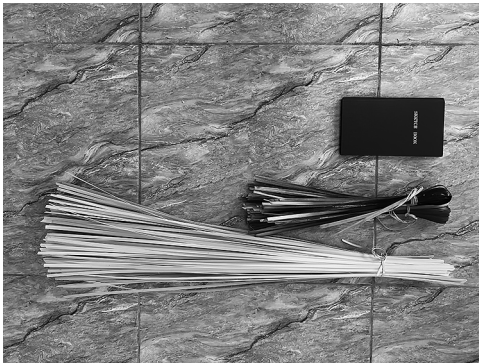


写真3 表皮の竹簾と、中身の竹簾

表皮は剥ぎたての水分を含んでいるうちに折って、括しておく。

のみだけれど、小学3、4年生になると各家庭で親族に教わりながらナタを持ち始めていたよ」とのこと。

ナタを用いてタケを剥ぐ。ラオスの編み組みに欠かせない工程をさせてもらえるようになった背景には、タケが加工されていく様子に釘付けな私のナタに触れたい思いが伝わったのと同時に、もしかしたら彼女たちのなかでそろそろナタに触らせても大丈夫だ、と小学3年生には進級したと思わせる何かがあったのかもしれない。

引用文献

ກະຊວງສຶກສາ. 1985. ທັດຖະກຳ ຊັບປະຖົມ1,2,3.

Kameda, Chika, Viengsamone Thammavong and Souphachay Phouphasouk. 2019. *Forest Plants of Central Laos: A Field Guide for Forestry*. Vientiane: Faculty of Forest Science, National University of Laos.

音で知る泥炭地

——中央カリマンタン州でのフィールドワーク——

岩 田 薫 *

フィールドワークにおいて、研究者はいつ「フィールドに入った」と感じるのだろうか。

私にとってそれは、視覚でも文字情報でもなく、音と湿気として訪れる。インドネシア共和国の首都ジャカルタの空港に降り立った瞬間、機内の乾燥などなかったかのようなムワッとした湿気と生暖かい風に包まれる。そ

して何より、東南アジアの街特有の喧騒が耳に飛び込んでくる。

本稿では、インドネシア共和国中央カリマンタン州の州都パランカラヤ市近郊で行なった調査を通じて、泥炭地という環境を音から描写することを試みる。中央カリマンタン州はインドネシアでも有数の泥炭地域であり、

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科